2.平成3年度の発生における特異発生ならびに新発生病害虫について

北海道病害虫防除所

1)平成3年度における主要病害虫の発生状況

表1　　平成3年度に多発生した主要病害虫

作物	やや多～多発(平年比)した病害虫
水稲	縞葉枯病、ばか苗病、褐条病、苗立枯細菌病 セジロウンカ、ヒメトビウンカ、アカヒゲホソミドリメクラガメ、イネミズゾウムシ
小麦	眼紋病、ムギキモグリバエ、アブラムシ類
とうもろこし	アブラムシ類
大豆	わい化病、アブラムシ類
菜豆	アブラムシ類
馬鈴しょ	そうか病
てん菜	そう根病、西部萎黄病
りんご	モニリア病、腐らん病、斑点落葉病、モモシンクイガ、ハダニ類
野菜類	タマネギ及びネギのネギアザミウマ、ネギのさび病、ニンジンの黒葉枯病、 ダイコンの軟腐病、ナスの半身萎ちょう病、ハダニ類、キュウリのアブラムシ類

2)平成4年度に特に注意を要する病害虫

(1)水稲の褐条病

平成2年に空知管内で、その後上川管内でもカスガマイシン耐性菌の出現が確認された。代替農薬を検索中であるが、現在使用できる農薬はない。本病は平成3年には全道的に多発した。種子伝染性の病害で、浸種、催芽、育苗条件により感染、発病が大きく影響されるので、発生を助長する循環式の催芽方法は避け、苗床を高温にしないなど、先に指導に移されている「水稲の褐条病に対する当面の技術対策(平成3年3月、北海道農政部)」に準じた耕種的対策の励行が必要である。

(2)水稲の苗立枯細菌病

平成2年に同定された細菌病で、現在までの発生は8支庁35市町村と稲作地帯全域に広がりつつある。種子伝染性病害であり、種子は育苗期に発生のなかった圃場から採種し、育苗中の高温・多湿を避けるなどきめ細かなハウス管理が必要である。詳細は「イネ苗立枯細菌病の発生実態と緊急対策(平成3年度北海道農業試験会議資料、中央農試稲作部)」を参照。

(3)水稲のイネミズゾウムシ

昭和61年の発生から増加を続け、現在10支庁の58市町村、水田面積の7.5%に達した。発生地域は道央を中心に増加したほか、微発であるが稲作北限の名寄市や訓子府町でも確認され、ほぼ全域の発生となった。平成3年の被害は渡島、石狩、空知、上川などで目立ち、越冬成虫密度も高いと予想されるので、発生動向に注意し、適正防除に努める。

(4)水稲のヒメトビウンカと縞葉枯病

平成3年の越冬世代幼虫は上川、空知、石狩などの道央で高く、また5月以降の高温・少雨経過により8月前半までの密度は著しく高く、昭和60年に次ぐ異常多発となり、その後やや減少したが、道央地域では高密度に維持された。一方、縞葉枯病も上川中央部や空知北部でやや多目の発生であった。以上からヒメトビウンカの越冬幼虫密度は高く、また縞葉枯病常発地帯ではウイルス保毒虫密度も高いと予想され、春季畦畔の越冬幼虫の生息状況や保毒虫の把握とそれに基づく総合的な防除対策が必要である。

(5)麦類のヒメトビウンカと北地モザイク病

平成3年6月に長沼町の春播小麦、たんぱくに発生した激しい株の萎縮叢生症状は北地モザイク病と診断された。周辺の春播小麦の発生圃場率は90.9%高く、秋播小麦でも発病したが症状は軽かった。上川地方でもやや目立ち、網走地方でも散見された。主要な媒介昆虫ヒメトビウンカの上川、空知などでの多発が大きな要因と考えられ、保毒源も多いと推測され、発生増大が懸念されるので注意を要する。

(6)大豆のジャガイモヒゲナガアブラムシとわい化病

わい化病はほぼ全道的な多発となり、発生・被害面積率は各々60%・10%、特に十勝地方では各々90%・17%の多発となった。媒介昆虫であるアブラムシの飛来が例年になく多く、その時期が発芽期～生育初期に集中して感染率が高まったためと考えられる。平成3年はアブラムシの発生が多めに推移し、特に越冬前の有翅虫密度が高く、越冬卵量も多いと予想されるので春季の有翅虫の発生に注意し、感染防止に努める要がある。

(7)てん菜の西部萎黄病

過去(昭和40～50年代初め)に女満別町などで多発したが、その後は稀に発生が見られる程度であった。平成3年には胆振、後志、石狩などで多発生し、特に胆振支庁では発生・被害面積率は各々43%・17%に達した。前年の暖冬により罹病茎部が越冬し、ウイルス保毒アブラムシの増加が多発原因と考えられる。対策として主要な伝染源であるてん菜罹病茎部の適正処分のほか、他の宿主植物(ホウレンソウなど)からの伝染にも注意が必要である。

(8)ダイコンのゴミムシ類

ダイコン根部の被害は道南地方で昭和60年頃から問題となっていたが、平成3年には渡島中部と後志南部でも多発した。直径10mm程度の大きな食害痕を与えるので、商品価値を失い破害が大きい。加害する種の確定と早急な防除対策の確立が必要であるが、ゴミムシ類の被害は一般に作物残渣が放置された園場などで高まる傾向にあり、残渣除去など圃場衛生に努めることも大切と考えられる。

3)平成3年度に新たに確認された病害虫(表2)

表2　　平成3年度に新たに確認された病害虫

作目	病害・害虫名	病原菌・害虫の学名	発病・加害	発生市町村
イネ	苗腐敗症	Pseudomonas glumae	苗腐敗(もみ枯細菌病菌)	早来、蘭越、三石
	かさ枯病	Pseudomonas syringae pv.oryzae	葉の黄変・枯死	石狩
コムギ	麦角病	Claviceps purpurea	菌核混入	長沼
	縞萎縮病	Wheat yellow mosaic virus	株の萎縮・黄化	恵庭、千歳、長沼
オオムギ・コムギ	しらみだに類	Siteroptes sp.(spp.)	粒褐変・充実不良	江別、新篠津、岩見沢
トウモロコシ	倒伏細菌病	Erwinia chrysanthemi pv.zeae	葉鞘腐敗	雨龍、共和
テンサイ	うどんこ病	Erysiphe poligoni型	葉に白色粉状菌叢	札幌、長沼、二セコ、帯広、倶知安
	シラフヒョウタンゾウムシ	Metiorhynchus querendus	葉の食害	小清水
ソバ	疫病	Phytophthora fagopyri	株の萎凋・枯死	深川
タマネギ	白色葉枯病	Erwinia ananas	葉の白変・枯死	石狩管内
	りん片腐敗病	Pseudomonas gladioli	収穫後のりん茎腐敗	富良野、中富良野
ネギ	紅色根腐病	Pyrenochaeta terrestris	根の紅変・生育不良	長沼
ゴボウ	維管束褐変症状	Verticillium dahliae	根の維管束褐変	後志管内
ナガイモ	シリンドロカルポン根腐病	Cylindrocarpon destructans	貯蔵中に褐色・円形陥没・腐敗	幕別、帯広、芽室、東藻琴、名寄
トマト	褐色根腐症	Pyrenochaeta sp.	根の褐色腐敗・コルク化、萎凋	伊達
キュウリ・メロン	ワタヘリクロノメイガ	Diaphania indica	未展葉の裏面葉肉食害	長沼、静内
アスパラガス	茎枯病	Phomopsis asparagi	菌名(Phoma asparagi)の変更	
トルコギキョウ	茎腐病	Fusarium roseum	地際の茎髄部褐変・株の萎凋	各地
	立枯病	Fusarium oxysporum	茎の維管束褐変・株の萎凋	深川、真狩
シュッコンカスミソウ	疫病	Phytophthora sp.	地際部の根が軟腐状に腐敗・萎凋、枯死	長沼、浦臼、美唄など
シクラメン	葉腐細菌病	Erwinia herbicola	葉柄暗黒色水浸状腐敗・葉身黄化萎凋、枯死	七飯
花き類 (キンギョソウ，トルコギキョウ， デルフィニウム，ゼラニウム)	チビクロバネキノコバエ	Bradysia agrestus	苗の根部食害	各地(伊達、栗沢、上富良野、札幌)

目次へ戻る